

Centimetres

19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1

Kodak
LICENSED PRODUCT
Black

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

3/Color

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



絵本梅心流巻

13
1303
3



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

四兵衛物語 梅花氷裂中冊

江戸 山東京傳編



一齣 孝一見 得天一幸

さても栗野十郎左衛門ハ泉州堺の目口町と云ふ所ハ住夫婦の子
 業ハ漆紙と云ふ紙と云はれてつとけられ烟とたてけり前さきの月さうぢられ
 夏ありて信濃国ハ旅立ちたる二月をりて過ると云ふも坂さか本もとと云ふ所ハ妻
 沖津一子長吉大なるをいふと氣たうひて人と申す信濃国まきのくにの志まの
 方ハ信濃まきのにして様子ようすを問としめけりふとて堺さかいハ飯いらじと云ひにけり沖津
 親子おやこ中なかつのりて案あんじりぐふひけり飯いらあたるやうと待まち候こうけりふつふ其
 年としも冬ふゆのももふかんと云ふと云ふ沖津夫おつづおとこの思おもひがらと苦くるみつる也
 偶ふと病やまひふふり目めくふおりのつとくものもさすまを云うち瘦やせがら

こそりおこりしなるべも又えざりけり一子長吉ハ今年ワふ十才
 かりれども立不とられてかゝりたふたぐひすれり孝子とて一頭
 父のゆくゑの志れを愁ひ一頭母の病のかりに悲しくおぼして
 快まわさじめ母子連立て父のゆくゑと尋ねぬものを看病おこ
 らざりしにけりわりのむとせざれば益困窮して朝夕の烟たふたてぬ
 けり看病のいと多く母の枕上おのりわたり草履草鞋を洗ひつ
 ぬ錢おこしてその日とあつて母の好むのいたし價をた食物と
 してこれと調て喰せ我ハ連日りのくぬぢちちり近村の医師の
 ちとふ行堂と合せて拜し何とぞ母の病苦を救ふと涙を流して
 ねむひければ医師その孝心を感て菜の價をさげと申く来りて療
 けりされば起臥の介抱よろがの支へ油お心とけけ物毎不自由

かり様おこり母お心をつらむを腹たせそいありのぼとたとひは
 の無理わりの支をひひても唯うらうらゆめらひてつらなりも
 おりては片時も病床ををるねば手を握り顔をわたりその日の
 ぶんゆめをいじくたぐね少く快又ある時の世の中の物語を
 ころあしは昔ハ背を枕足さきより穢たるものもぶらりれと
 睡ふく昔ハ我耳を母の顔およせてそひぶし母お心をつら
 ろして終夜寝むと気ぶんあり様子あらばとふ起て介抱を
 せんんなく千辛万苦おし尽せざるもあざりし由寒寒の時節
 のも薄けし母のぬくもつらとらひぬ我衣服をぬがて母お
 着せおのれの菟薦を敷ふまといひてワがふ寒氣をふせぬ母
 を又て涙を流しさきめいとぞり者のおらばるや汝はつらさ

梅花卷之中

薦莛と才小まきとひてつひの凍死ぬべし我のそも汝死ばいふせん必
 我為小衣服を脱べしとつば長吉うぐりて手をつくそのおめせ
 おもけれどもこれさうりいひしおのれし九人の子たるもの親小孝哉
 夫とつばいその才の役目小ゆびと某のひて物読の師小同とふ
 父の我を生るのりとなり母の我と鞠育あげよ小我を拊ささり
 乳をよへ長なり覆育我小心を尽して健あるまじさうといく度も
 顧之いへるも意を回し我を腹抱きぬむひて大小便をさされも
 けがれしとせむその濡たる所小母のねむひひひけり所小我をゆりさせ
 らる我やうやく成長してその恩徳を報んとまされどもその恩の高大
 かなる夏天の遙小高く窮る死がごとくあてわらう報せざるも夏小
 あらごとと詩経との小昏小あつとと示されし詞我才小志むごと

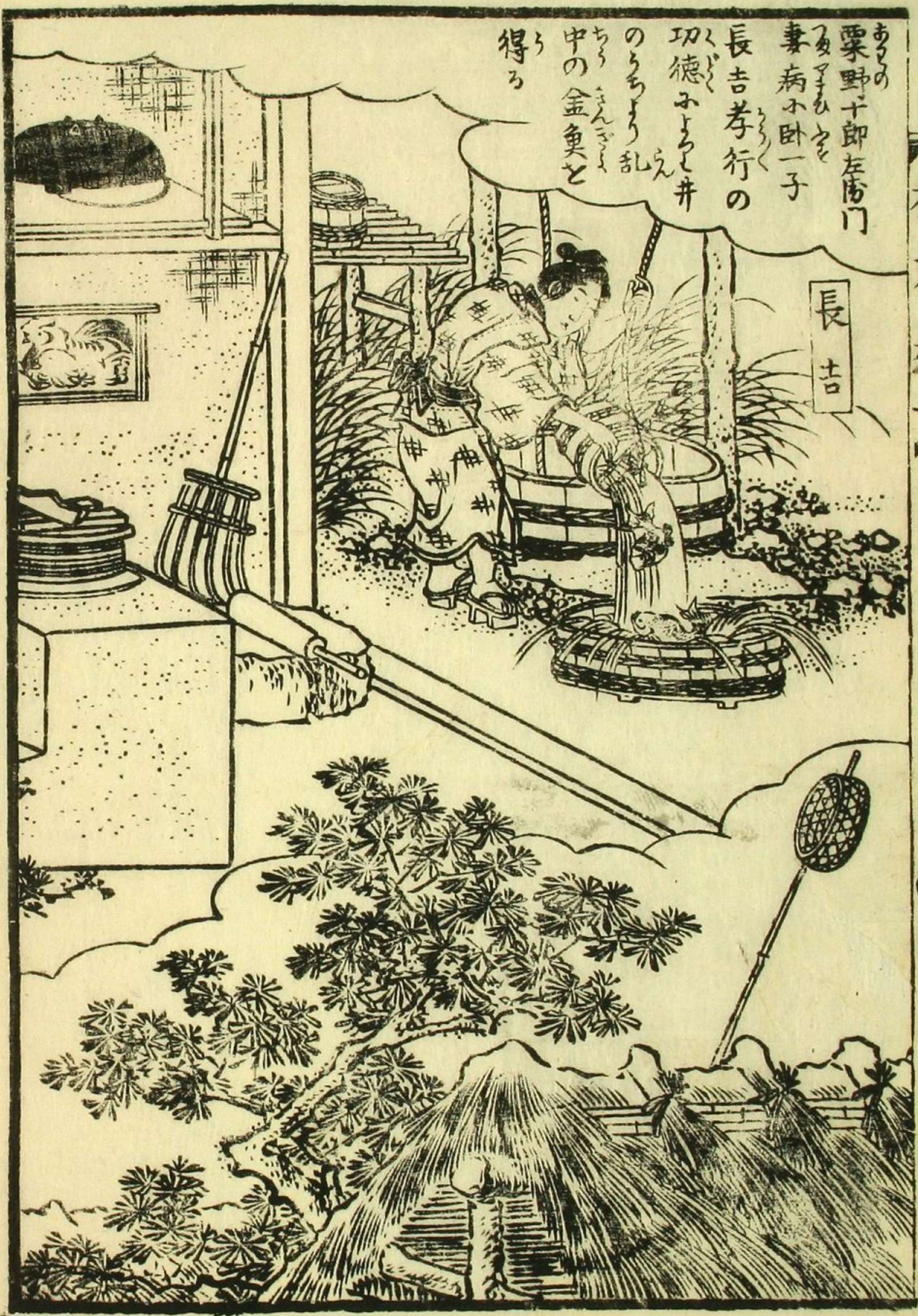
おろそそ志むとむとどたえ寒気ふあると凍死ともいふ母の大恩
 小むくもべ死や某幼稚しといふさかりひと志むと貧しと母を養ふ
 足ざるのちと悲さ夏のさりなりわらうゆらむと某が夏小心
 とほむむのど一日もを争快気ぬむのどとつふも泣声あてわむ
 母よりもちる者病と長吉が顔のいたく瘦あそとるえければ
 母の何とをみるひやり只むせつりて泣けりあぞ長吉あつて背中を抚
 さめ詞と尽しと母の心と慰る心のうちをひやれて衰りしと
 長吉つらうふ小母の病わらう急小快気あつれば様子むと快
 気あつたうち父のゆらうとたがむをば夏もあつたれふつけれ
 かつけともかく貧しく母の者病心の終ふやがじ我女子の才
 かなる此才を質小入るも貧苦を救ふ小男子の才はそれもある

びはうへに仏神を祈るより外にいと多きひききり寒きものいふとて
 母の深く切して日三度裸となり門口の井の水を汲て頭
 より牙をそぐ一日の間此苦行を終ると佛神を祈りけり満
 願の日井の水を汲て盥ふりけり乱中の金魚罐のうちに
 とうりいぬ長吉の目ぢり魚なり大に怪しむる盥のま
 母の前へ持行て入せけり母をえそられこれ前の年夫
 十郎左衛門の大明とてたぐさへ飯をあひつる金魚といふ魚は
 似たりがそれよりもあな異形にて且江のうらなるつふまをこれと
 かの珍魚の井のうら生ぶとていれは正是佛神汝が孝心
 を感とあひて此魚をよめあふ疑なく唐土の孝子水不卧て
 魚を得雪を穿て簀と得たりたむむん此魚は世にまれなる

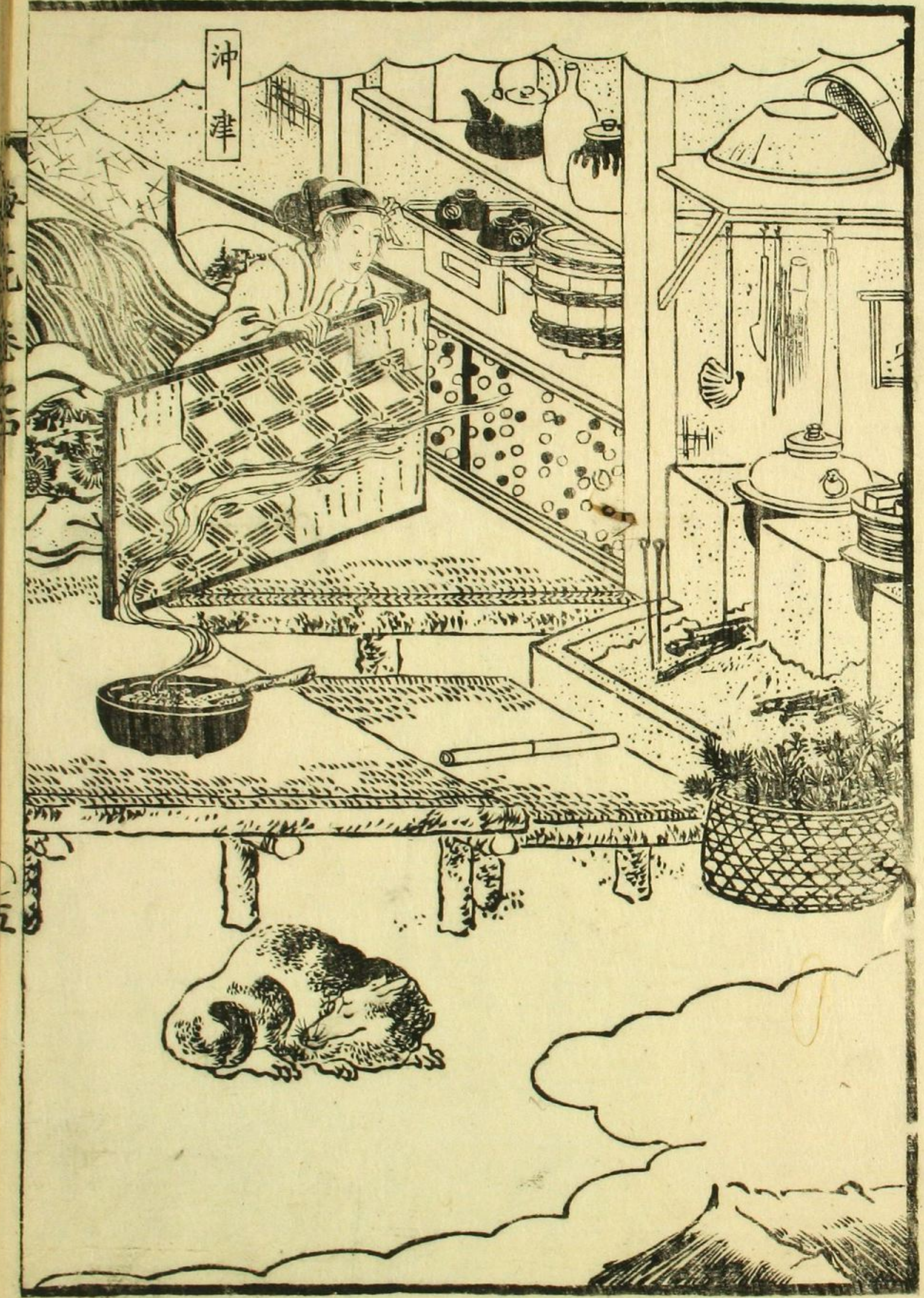
りのわねが賣代あるがたうと價を得てし中街へ持行てし買人
 と持人と命じけり長吉の母の詞を聞て大に喜びいそぐと魚を
 たぐさへ街へ出けるふその頃塚の好事の者おやめけり果して
 西尾の金魚を小判七十兩を賣てつりぬそれより塚へ乱中の種と
 りてそれと塚種といひけるぞめて長吉のいひわけにおあくの金を得
 て佛神の冥助親子の貧苦を救ふありけりこと天地を拜して
 益をびられよ何不足あり母の病をえとんものともひけり一日信濃
 の国のあぶの方より昏筒をきて告越ける十郎左衛門の前の月笛吹
 峠へて鷺鳥を教右衛門といふ者をおて立退ては草を口うちて見す
 る心得の為告やとと志じたり沖津こゝ狐読とひじく一声呀とさけび
 てたふしけり長吉あつ抱おに葉をよへ背中を抚るじてさむぐ

栗野十郎左衛門
妻病小財一子
長吉孝行の
功徳ふよと井
のちまう乱
ちゆうさんま
中の金魚と
得る

長吉



沖津



けりりけりあぞやうくと頭をあげいと苦いげふ息吹つとそひひけりんさそめ
 悲れそを同りのゑ十郎左衛門どの何等の遺恨あると教右衛門
 を打りふやぶじささ十郎左衛門どのあいのまごといひれまを語りざれ
 けりそめあまじささも鷲太敷右衛門どのあいのまごといひれまを語りざれ
 姉の舅なり我命あまの目もおろろなり思ひがそちふくけりぬら同
 おろそじ我れと下総の真間の商人木幡屋弥次平とあ人の妻とわを
 て十七才の時一人の女子とてその女子十才の時田急あつと離縁
 親のれとふつしけつが兩夫ふまもあ人の女の子の本意とせう一所を
 せも老父を養ためやむことを得て縁をせあは十郎左衛門どのあ
 再縁してやうやくそちとらうみぬ前さきの夫弥次平との胤をせとして
 うらうら女子の成長の後名を小梅といひ梅の与四兵衛とあ人の者の

妻とちり今の住所いささうたふねども東国辺に住とさささればあ
 小梅とそち胤がうと同腹の兄弟あり切あ梅の与四兵衛とあ人の鷲
 太敷右衛門の子ありと同十郎左衛門どの教右衛門を打あかそめあ
 汝等兄弟已敵同士とちりつちり折を得ていへて夫小語り小梅
 が住家をたがひたえそひじに親子の對面兄弟の名告をもささす
 とつてそひ居つふいささ宿世の悪縁を敵同士といわうへらざつと
 即左衛門どの人殺りの大罪を犯し玉びその才の果は鷲鳥の餌と
 たり玉りんそと必定期りといひて悲歎の涙おむせめつとけりば長吉
 にあまれそを切ああありけりそいふせん何とさづけたそ母と顔と
 合せつ泣より外のことそちに沖津のあ病のうへあつあ
 たうを同気かまそくようつとたのこもけちり又えければ長吉

父と母との西雛義我才一ツ集うと何と云へき思案のわくた
心まゝつらつらうらうらと

第七 梅為揺銭樹

その初おさ愛小ま唐琴浦右衛門が弟滝次郎ハ兄浦右衛門花
小敷右衛門のつとあふなりつとと深く悲之主従の屍を葬て七日
くの追善をいせつととてふ日敷もたちければ主君ハ願昏をさ
げまがくおんやとをむのて兄敵を許しめ玉のれじと願ければ主君
それとまじめつととてたふおがされ面前ふじよびて盃を玉のて願
さやまがくくいとを注ぐるとあひご首尾よく敵を打あふを二敵
登しとて一腰の刀と一面の鏡ととり出してまこのさひけのハ刀ハ
玉骨とちぐけ此鏡ハ氷姿にちぐくも小我秘藏の物といへども

汝が才と主護とぶれ靈物たればまがくくかあふのわりとてあつり
けとて滝次郎その恩惠の厚きと感て落涙一茶いと食まじして私
宅におつとちちふ旅のよとあひとそりの刃の劍鏡を才みつけて僕袖助
一人を具し古郷の露を背後に返し客路の雲を眼前ふえて心がそく
も主従二人東国の方をころろさしてぞ出ゆけり
○此時小串貞行ハ鎌倉より版国して信州の本館ふあつて滝次郎
ハ切ひて愛臣なるゆふ小劍鏡をかり玉のたぐひの恩憐あはせとぞ
影玉骨刀氷姿鏡のゆれその靈験あるとて後編おつとびつらり
發兌の時を待得て又まべし

愛小ま武藏国芝崎村とふ所小梅の与四兵衛とのふ者ありけと妻を
小梅とのふ夫婦とも小梅を以て名とすることつらつらおまぞわつた家

の前まえに大おほいなる梅うめの木きありその梅寒中うめえんちゆうより花はなをひらけ實みをむと
 ぶこと家いえ万まんとふ数かずをたふと与四兵衛家よしべゑいえ食くふといども毎年まいねん此梅
 の実みをとりて梅うめむきとのふのを製せいして賣う代しろは衣食いしょくの料りょうととるふ
 夫婦ふうふ一年いちねんをおろふたりぬ苗あひま採とるを小梅こうめむきとのふのちとて
 ぐわぬ苗屋あひまぐものこをひてこれとめつる由よし不別ふべつふたりひひをむ
 ども各別かくべつの困窮こんきゆうもあつくくじけりく与四兵衛常つねふひけりり林和靖りんわせい三
 百六十株ひゃくろくじゆの梅うめを植う一株いちぢゆの実みをひて一日いちにちの費つひふあはとと同我家どうわがの梅うめも
 衣食いしょくを生なる宝木たからきゆて実み是こゝ搖錢樹あつねんじゆのたからきなればあろそふくがじとてあ
 たら衣服いふくをゆめたる時ときはまづ梅うめの木きをとりてのちふととて着ちや目めく
 の食物あじふくもまづ梅うめをとりてのちふととて食く一夜いちや卧ふもかの木きの方かたを踏ふ
 ふせむ深く尊敬そんまつけりが草木くさきらるるなりといども切きの木きもまことの誠まこと

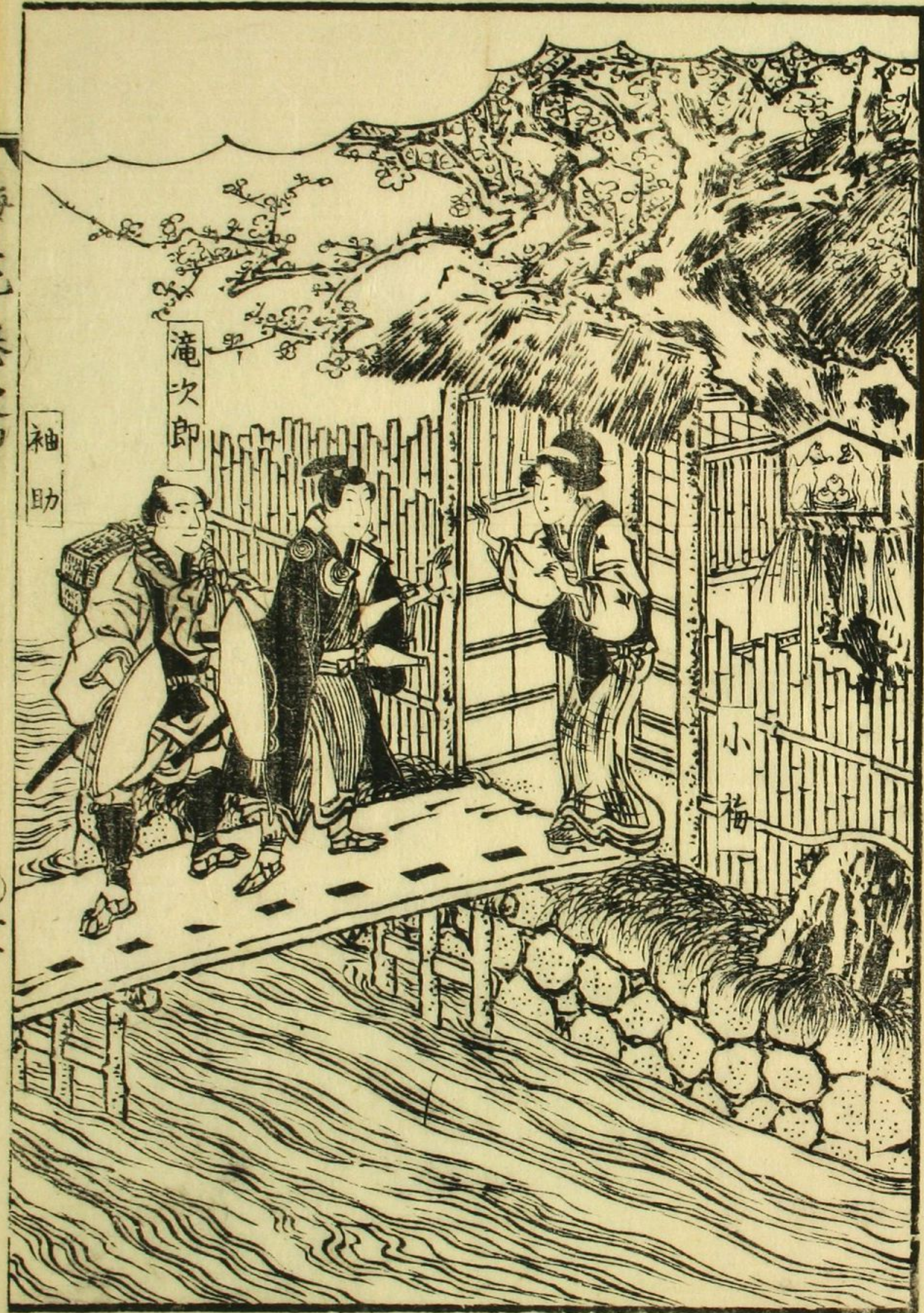
心こゝろを感かん心しんけりや実みのること年としぐまはしぬれふりて里人さとびと等らう異い名な多た分ぶん
 稱なづとて梅うめの与四兵衛よしべゑとのひ妻つまをも小梅こうめとよびなりて一日いちにちの梅うめ
 梢こゝろ小鳥こゝろありまりて哇わこといと悲かなしげふ鳴な与四兵衛耳みみをゆめかけてさそ
 も鳥とりち死しのつろさこと妻つまむむひてひけり我われらのぞら連夜れんや
 夢ゆめえぬく殊こと小切こぎの鳥とりの悲鳴ひなうといひ若信州わかしんしゆうふおつと親人おやびとの御病ごびやう氣き
 ありあつとゆくとこゝろ氣きふゆらそしこゝろさふあふどもひさしく音信おとがねを同どうぞ
 じぶちうささち信州しんしゆうふゆりて御安否ごあんひをとるひら折せりあし
 足痛あしいたふを歩行あしをたふぬばせんといひて飛脚ひしやくをやとひて安否あんひを同どう
 んとるふかりとのひら硯引えんひきよせを昏状こんじやうととめけしむ妻つま小梅こうめれ
 と同親人どうおやびとさふちや老年らうねんふあふひあふ何なにとては方かたへひとり玉たまを
 ちとふ与四兵衛よしべゑひけり我われもあふふゆめ対面たいめんのたびくそ仕しを

辞して家小つらと老を安う養食更ととらふつとどもいなく汝が幼年の
 時我養食三月のつらさを今御主人の御慈悲あて為人ぬれ
 たと一生勤死さうともその大恩にむくられど手足のそとくつら
 けを辞する意をばらねも子母急の忠義とるとのさふ由
 二言とつらと詞をくこれまでお過ぬとつらふを小梅又つら
 老ふふ男へひとりしむらわらうせめて一日おまふあうて孝行し
 古もせうの妾が身小つらと不本意のつらふゆびるや何とを御
 飯国あう中つら又もおとらああげらとつらとつらつらと葛菴よ
 つらつら縫たは布子とつら取つら妾が手織のつらつらつらつら
 つらつらこの一品せめて寒夜のお寝巻おんふけつらつらつら
 つらつら木曾の麻衣同遠ある便を同人端つらつらつら

かつ折しも外の方小梅の身四兵衛宅にこれつらつらと案内を乞人
 あり小梅立出て柴の折戸を排ひつらつらつらつら十五六才の美麗
 若衆大小立流旅将束菅の小笠をたがえてつらつらつらつらつら
 おぼしくおとつらつらつらと健ちる若者あり小梅の腰をめぐつらつら
 けつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 懇懇おとつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 唐琴浦右馬門が第滝次郎とつらつらつらつらつらつらつらつら
 小身四兵衛のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 行出つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 ありて此武藏のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 外小供の人むらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 袖助つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

此バあつるの理ありその子細の一回ふかると尽くぐく〜とあ
 めぞのさまづらねるといひつゝ一間の壁をおかひて土壁の花売延
 と敷まゝうねが小梅のつひじく鹽水をとちん滝次郎が足をそ
 ざたじ夫婦 礼義を尽あぞ滝次郎まうけの席ふうち通る
 与四兵衛まが小梅と滝次郎がまふ出して目つへをを袖助いたひ
 ぐまこえたる者なりねがそれあも妻と引合せ埋火のたて茶のと夫
 婦が何ととめとほお氣とほくが滝次郎あくるさぶとつぐみ无用
 と押らり手四兵衛とちうばけのいけり某此度の旅行別儀あぞ
 へ〜その由とあつてあんとつひてまう涙とささふかして兄浦右衛門
 妾藻の花をゆめつゝ始より浦右衛門鎌倉在勤の留主枝蓑文太と
 茨通の夏あひび藻の花を害したる人の金三百兩と主君よりたぬ

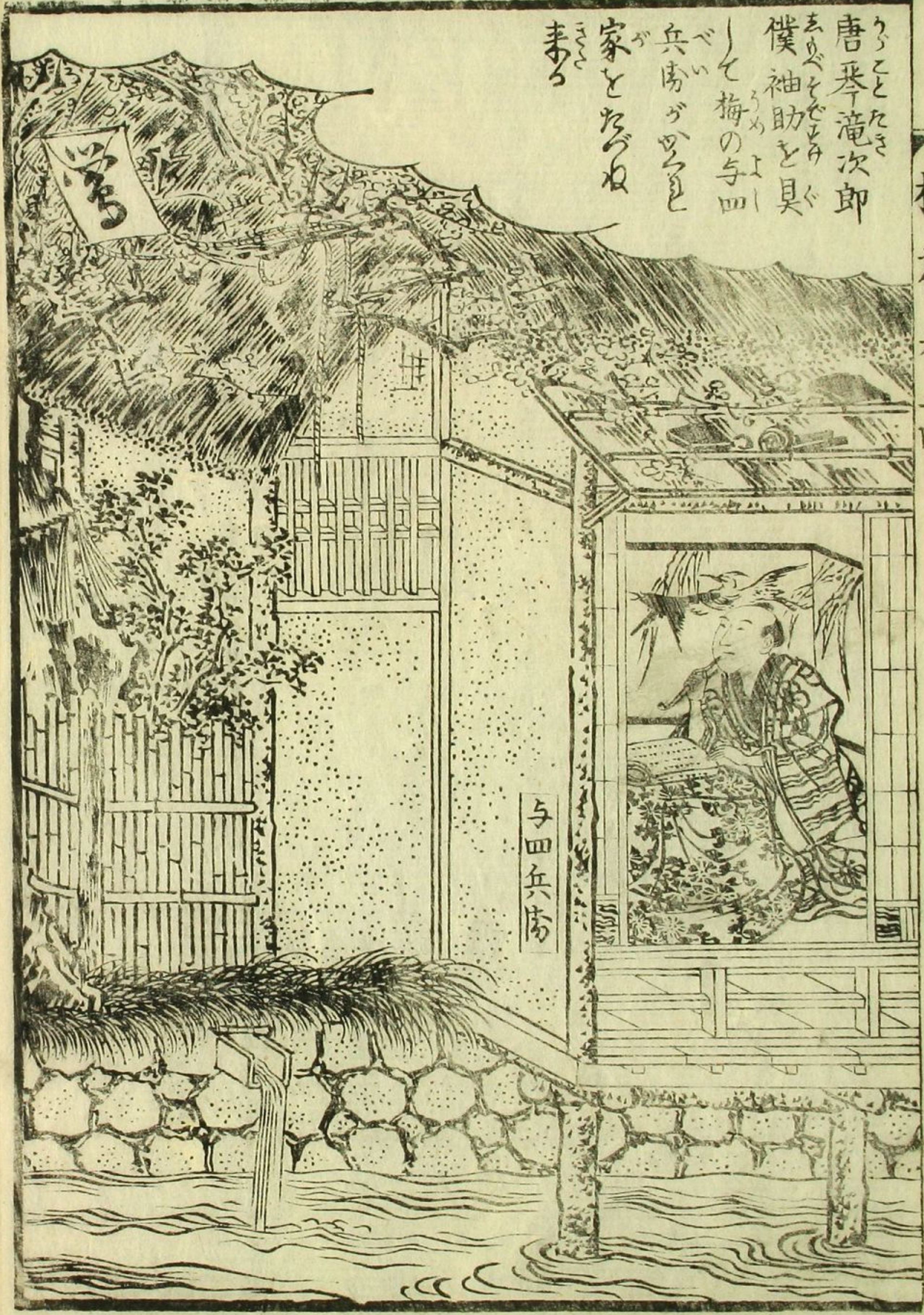
乃てなる 鶴藤四郎の刀を奪ひて 兩人出奔したり 妾藻の花が怨魂金
 魚小還着したる 夏浦右衛門と具して 妻敵打小出笛吹峠を浦右
 衛門の蓑文太小切つておせと 数右衛門の助太刀の者小切つて夏ま
 でその始終をはぶきふつてけしと手四兵衛を引つてあさとを志げ
 詞もいぞぞ小梅のあつたふおとらけて持くる土瓶を 困爐裏おとさび
 たり灰小目もあるをその 終をふちうぬ 滝次郎あつていひけりおとら
 さまの理ありそれ小つさば度某主君小いとを願ひかの蓑文太が
 ゆ〜瓜尋ね兄の仇をむく 鶴藤四郎の刀をこそとて唐琴の家再
 奥をねがらん為め 旅路をい出つとてあつた 袖助あつてより出て手四兵衛小
 切らぬ身の御親父数右衛門どの 敵ハ栗野十郎左衛門とつゝ者あて
 泉州堺小住武士の浪人のいゆへ志をぞかりしと 同ちその由へを



袖助

滝次郎

小梅



与四兵衛

唐琴滝次郎
 去りて袖助を具
 して梅の与四
 兵衛が家と
 家とたぬぬ
 まる

梅
 花
 巻
 之
 中

十

たはみて父の仇をむい 妻とつを小梅うち同てまこ大おちろ心
 うちふるひける夫のいまごあざれども栗野十郎左衛門どのの
 妻の幼少の時別れたる実の母の再縁一あふ夫ふくぐひは長土口と
 けふ男子どうもあふとあふ同ぬゆひの一度尋行たえてひに対面
 ととあひ敵同士とわりつるいりち宿世の悪縁ぞは妻を夫ふくぐひ
 妻も敵縁ある者と離別一あふの必定わりさるると語りさるも
 よもどわらうぐやめさるはまきとさるたゆむとあふ思案ふれけ
 がたふ語るも折を又合せわらうれんと心ツふとあふ居る胸のうち
 のくじさ何ふたふんゆもはと四兵衛へ小梅が心のうちをつも
 父の敵の姓名あふとあふの幸わりさらもあふ父の仇よりな
 ちのり御主人の敵ふれぬ助太刀をけりまづその蓑丈太とあふ

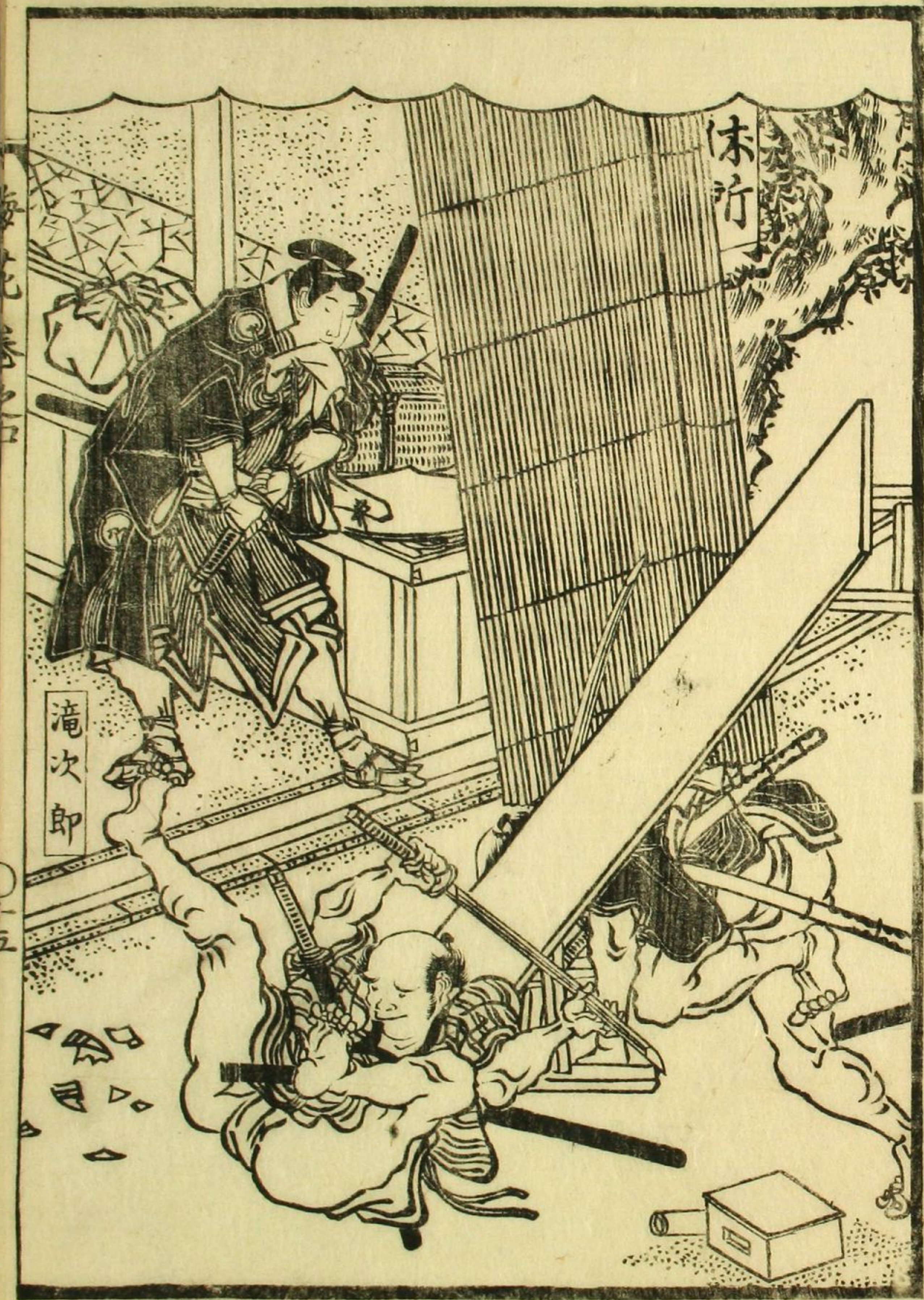
と打て后父の仇をも報ゆ一夫ふつても口とらに折つる者
 足痛家のうちふあむい妻あつる心へ矢猛ふちゆもあふ
 供を侍りていさあてあふ心いせまあふんが何とぞ志の同拙宅
 小おん逗留せられしおの色一念の誠を以て痛と治しお供を
 うづとあふ滝次郎汝が忠志の過分なり草葉のゆげを兄らも
 さざる賞美一あふあふさるちかす袖助の僕あふりよく剣法を
 学び得てあふも力量とどとたれが事おのどとて気づひは汝の
 只片時もある痛と治し泉州へ赴て敵の手つらとをゆとあふ
 ゆくと尋ねて父の仇をむくゆとあふのうとあふ力とたのむこも
 あふん我ゆくさる此通るとあふて国ぐ宿ぐの心あてとあふまじ
 たり小紙をよめ我ら立寄りの汝も妻の子細をわらん為ぞ

ちりぐふ是非とも酒店ふかて田んといひて滝次郎が胸ぐとさう手
 とさうてひまわらぬが袖助今いかにまを得て二人のあつてさ
 右小佐と大地小童とがけはけて滝次郎目かへしとくも田ん
 あらふの者どもゆくさば立あさぐり察する所汝等ハ新田桃
 井ハ和田棹の残黨原の姿とやつてあちゆくわらんめりら
 首とりて鎌倉殿の恩賞おあぐめらん覚悟せよとちりぐふさび
 づちとさうとさうのさうて手あぐ刀を抜るを滝次郎いへんうぬて
 手をゆる合羽とぬぎまを刀の柄小手とかわれば袖助あつて押留
 大事とめくらんおんえをめりじくおん手とさうあふべうと此奴
 等ごとく氣輩どもい物の数ふゆいごころの拙者ふまうせむひか
 こゝを御見物あれじとて押やねハ醉狂人どもめりくと奇笑言

長さ下郎めがヤ一糸マソくは世のゆとぬとさうせとく人観念
 せよとよづらしく前後左右上段下段ふまうしつけさう袖助ハ
 心中小刀小血ぬりてのちくくのさあげとありひつめりらふ
 つら茶店の床机ととりてあままハ雷光石火とひりめり太刀
 とちりしくとおおふいぬく左右の足をさうし胸板膳の
 用捨ち踏たふり踢たふりけいけいの者どもつひふ敵とさうこと
 あらふ刀を肩おろして逃たぬ袖助ハいかにいかに詞ふ似合
 ぬ腰技どもとてあざけり汗とぬぐひて居さうけりさうて滝
 次郎かといさう立出て袖助がさうれを賞とつひふ主従打連
 ていさうゆさうぬ

第八回

剪一狂拾雪一女



出羽越後の堺小葡萄峠と閉えし山の間に深くたぐひま
る嶮路わり殊小北地第一の雪所めて谷の四時とも小
三冬より春ふゆるそこの数夫の積雪路徑をうづめて
スえつらど誠小玉をめて造つたる山の如くさる冬月
の間に常小雪あはしと雪巻風車輪のごとく小吹め
あふ者忽雪中ふうがまされて魂魄をらふとむる者
ぞ峯よりおつる雪顔の大山の崩ゆる小異わらむそ
千の雷の一度ふ声と発るが如くあて旅人の肝をひ
希有の雞所なりとて旧鳥菘丈太棧等西人のゆへに
ちふの三百両の金鑄藤四郎の刀も大骨折てあるの
かりぬえんとぶなく棧が小龍衣たる衣服を賣代

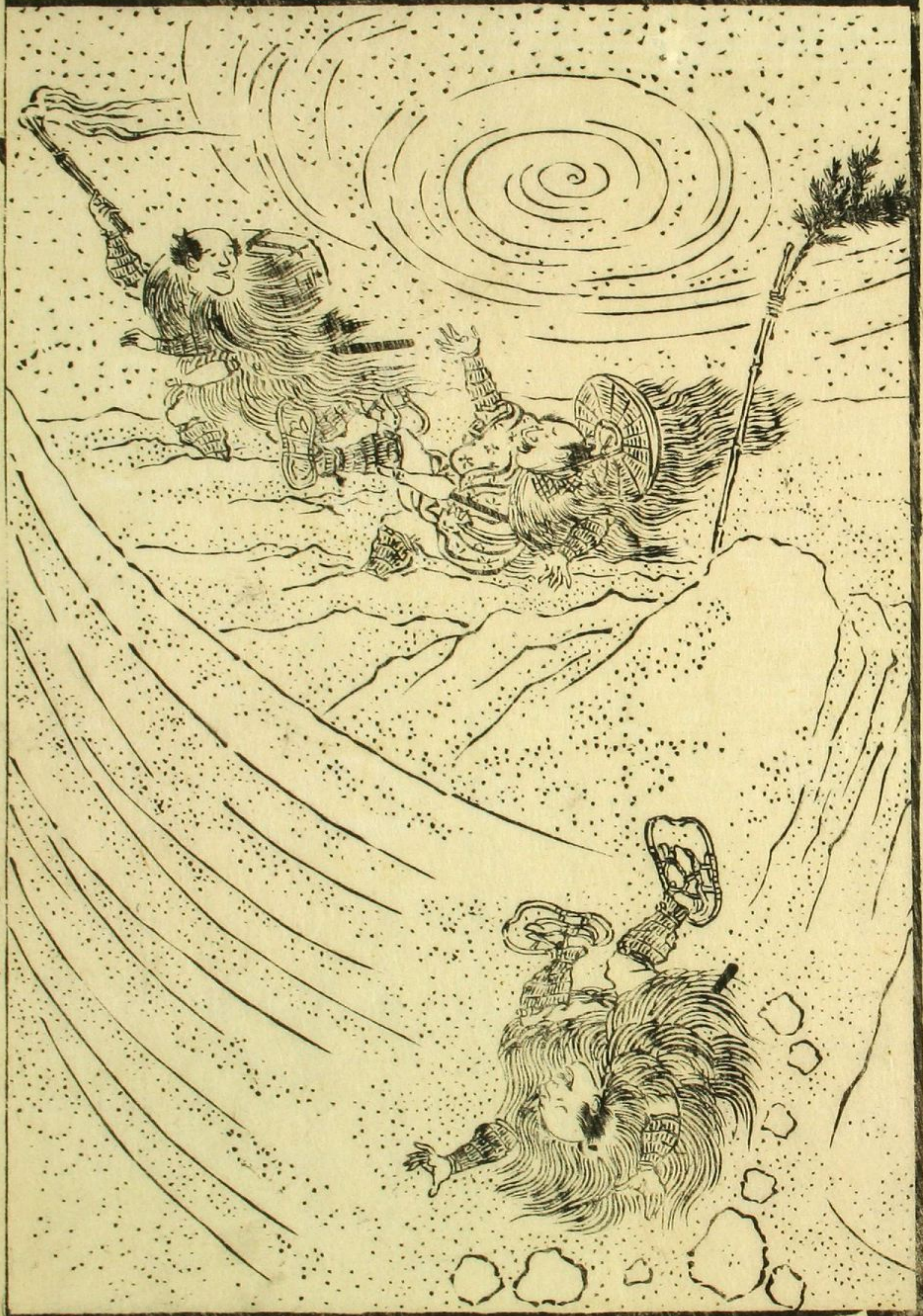
路銀となりて連立て越後の国におち来り小葡萄峠の
陰小あやうげなる荒屋のあるをりあてかつし任
ごとく山深き所なりけり耳小満るもの溪水の漲る
眼小遮るもの松林小とる霧竹叢おたり畑のこたり
住家も棧の愛情小ひひれて侘しともるの一日二日
始のわどい菘丈太弓箭をたぐへて山中を奔走し鳥
て粟小吹ははらふ飢とあつたがやどなく冬の半小
日小夜小雪ふりて路徑とらぐと符をさるもあつた
餓死べーと思案して二の悪計をひつと頭小白
面小白粉をちとじオア白布をまきひて世小称る雪
姿小打扮夜小葡萄峠の要路小出て往來の旅人を

衣服いふく 銭財せんざい を奪うば てるその目め をおろぬさそあや夜常よとこ とも
 なる雪ゆき つもくふと乱みだ り物もの を揚あ げとして五屑ごくせつ を飛と ぶごと
 雪中ゆきうち 小叢こそう 文太ぶんた の雪女ゆきむすめ 小打こうち ちてたつむらこゆた旅人たびびと マ来き り
 と待まち けりふむひの岨道さかみち とつてひとり一人ひとりひとり の旅客りやくかく 峯たかね 菜な りて編あ り
 雪帽ゆきぼうし 子こ をぬきと着き ぬ。蒲よもぎ 壁かべ 手て をぬき。虫むし 管くだ の脛すね 中ちゆう をま
 ひ。紫むらさき 絨じゆう をむき。棧かたさ をまき。長ちゆう 劍けん をよこへおどそふのてらちて
 明松あきまつ とあつとてし益えき つく降雪ふりゆき を打うち 払は ひつるあつとちてま
 こ来き ぬ叢そう 文太ぶんた の心こころ のうちふらふら此こゝ 難なん 所じよ を連つ れゆけく唯ただ 独ひとり 過か せ
 の膽いづみ 太ふと 奴やつ ろる試こころ ふひとおどおどしてえんとまが手て 練ね の雪ゆき 礫れき
 と打うち て明松あきまつ の火ひ を消け へたととつて立たち ぶさざり垂つら 氷こおり のごころと頭てん
 とあげてはしまひさけはかかの旅人たびびと 雪明ゆきあき ふとじつとある怪あや

や寒さむ 国くに の雪ゆき の精凝せいぎゆう 集あ りて怪あや 形かたち をあつとて同じおな 海うみ の世よ
 ふいふ雪ゆき 女むすめ ちがし鬼おに 魅ま 魍やう 魎りやう の仕業しごふ たり何なに もあれ目め 小こ の人ひと
 見み とよびひつ長ちゆう 劍けん を抜ぬ けてまうつけたつ叢そう 文太ぶんた の曾そう て早はや 業わざ の達たつ 人ひと
 かねが勿な 心こころ 刃やいば をひぬりてそれを避さ けまきりつる刀やいば を飛と ぶえ足あし を飛と
 して踢け ちみえんとつる折をり も雪ゆき 卷ま 風かぜ さのと吹ふ 来き てもけりみぞ叢そう 文
 太ぶんた の刃やいば をやそそれを避さ けるかの旅人たびびと の雪ゆき 風かぜ をまきり法あひ とあつと立たち 居ゐ
 たまか勿な 心こころ 吹ふ たつたれて遙とほ の谷や 間ま を落お ちたりけり叢そう 文太ぶんた の谷や 小こ の人ひと
 て捕と んもつぐつじむご骨ほね を折をり 度こと とつづき又また よき旅人たびびと の来き
 せじと待まち 居ゐ るさそかの旅人たびびと の谷や のうちふらぶらちて空そら と飛と
 夢ゆめ みるさあしを数かず 十じゆ 丈ぢゆう 落お ちりけり雪ゆき の埋う め残のこ せる少せう の梢せう を落お
 ちてとつたりぬ手て 足あし 腰こし など打うち ちれども寒さむ 気き をその痛いた くと

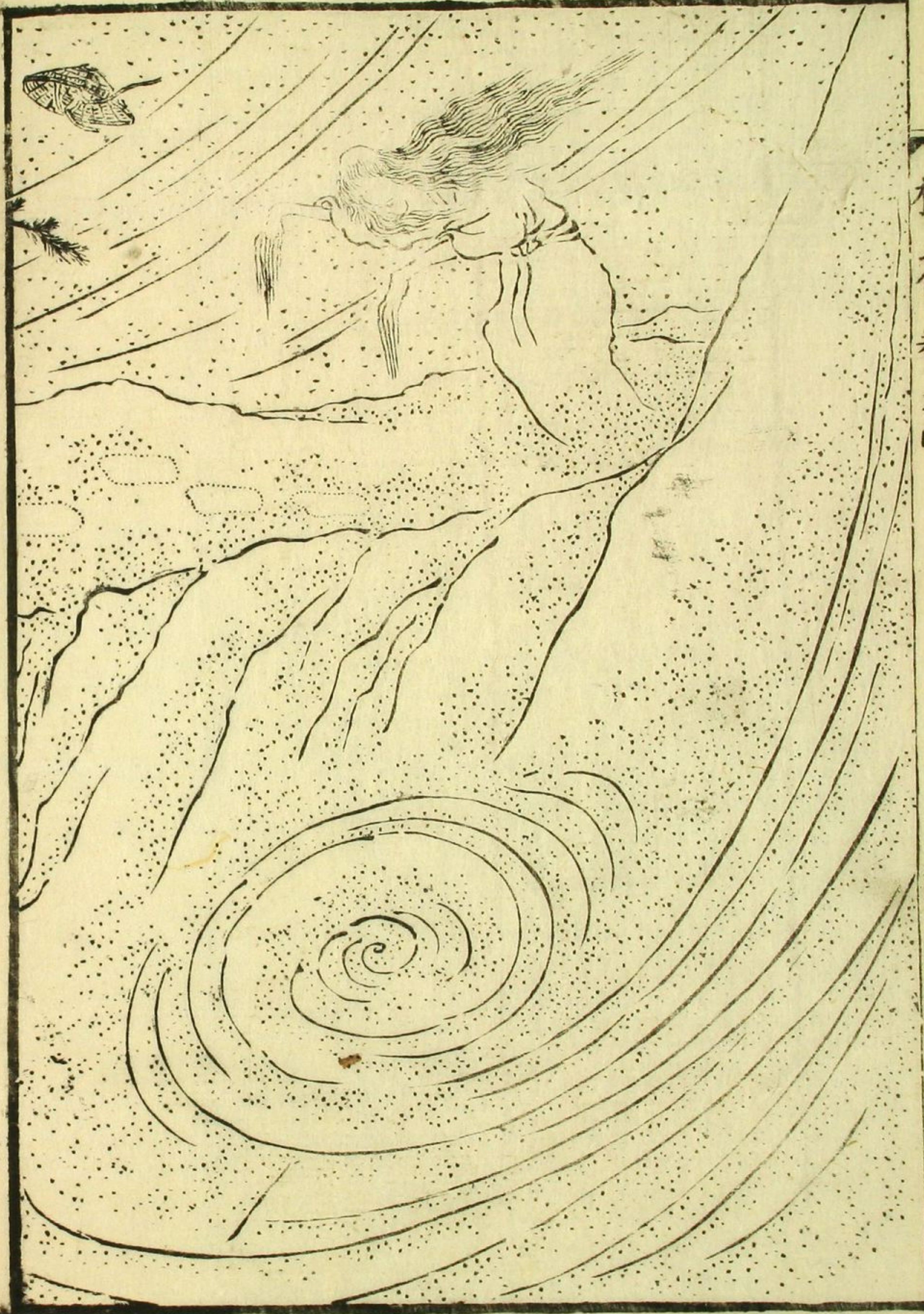
おぢをぢやうくその梢と抜出るといふもなす下の谷へ方仗の岩壁ふ
 てせうづもあぢを飯^えのむんそのあな更^{さら}のめじ翼^{つばさ}なきあけい
 かもせんまへやくわとんど進退^{しんたい}を失^{うしな}ひけり所^{ところ}ふ力^{ちから}草^{くさ}ふとりつ居^ゐ
 たる小枝^{こえだ}なりきと折^おて又雪のうへをさざりおち中^{ちゆう}木^きより首^{くび}の方^{かた}
 さほみふやうして落^おつやど息^{いき}だふむむつひみ数^{かず}十^{じゅう}丈^{ぢやう}の谷底^{やそこ}ふおち
 とどきうぬ此^{こゝ}所^{ところ}も又雪深く木の根^ね岩^い尖^{せん}もええざりかどふつりうと
 だねが幸^{さい}ふしそ身^み体^{たい}恙^やなしといふも上^{うへ}を又あぐねが岩^い壁^{へき}今^{いま}ふも頭^{かしら}
 のうへふおちぬるやうおぢえ上^{うへ}より雪^{ゆき}あへのおちきこんことこの気^き
 づうく唯^{ただ}肝^{かん}とひやうぬ下^{した}の谷^や川^{がわ}流^{なが}れ足^{あし}の下^{した}雪^{ゆき}とぶらう岩^いふせう
 ろく水^{みづ}音^ねとまほしくひびききこゆ雪^{ゆき}と踏^ふ板^{いた}て谷^や川^{がわ}ふおちいんこと危^{あや}
 しいぢうものふぢうど志^しのきりぢうど寒^さ気^き皮^{かわ}肉^{にく}ふとぢうど手^て凍^こ

足^{あし}軟^な手の指^{ゆび}屈^かむるまう赤^{あか}のうつまへ恰^{あた}も小^こ鰈^{ぎら}の腰^{こし}のこじ衣服^{いふく}
 雪^{ゆき}水^{みづ}濡^ぬと糸^{いと}眉^{まゆ}毛^げ鬚^{ひげ}此^{こゝ}小^こ垂^{つら}氷^{ひら}さきりまじて十分^{じゅうぶん}の雞^{けい}義^ぎのふぢ
 もあぢぬが長^{なが}く此^{こゝ}所^{ところ}ふあぢ凍^こ死^しぬべしと志^しを励^{げん}して只^{ただ}走^はりふは
 半^{はん}里^りむらうやまをやり道^{みち}あり所^{ところ}ふ出^いぬさむひの方^{かた}ふ灯^{とう}火^びの
 光^{ひかり}をぢとひらうまをええけし人^{ひと}家^やありと心^{こゝろ}うれしくいそだ
 由^{よし}てえふ果^{たま}くそぢれつらう小^こ家^やを雪^{ゆき}深^{ふか}くうづて麓^{のぞ}れ
 垂^{つら}氷^{ひら}の劍^{けん}とさうまぬふゆけなづらふ小^こ異^{こと}なりぢうど立^{たち}よりて采^{あひ}の戸^と
 とあぢと打^{うち}たけけやうく同^{どう}つけてあぢの女^{よめ}とおぢにけけ文^{ぶん}い
 出来^こて森^{もり}がれら声^{こゑ}を夫^とのうりあふうとつみあぞのやとよらぬ
 雪^{ゆき}道^{みち}小^こ踏^ふ迷^{まよ}ひら旅^{たび}の者^{もの}ふあぢ情^{なさけ}ふ一夜^{いちや}をあうせうせうされしと
 ついあぢの女^{よめ}あぢしもの案^{あん}ぢやうふあぢぢがぢうあぢぢこの大^{おほ}雪^{ゆき}ふ



海
記
卷
之
四

十九



海
記
卷
之
四

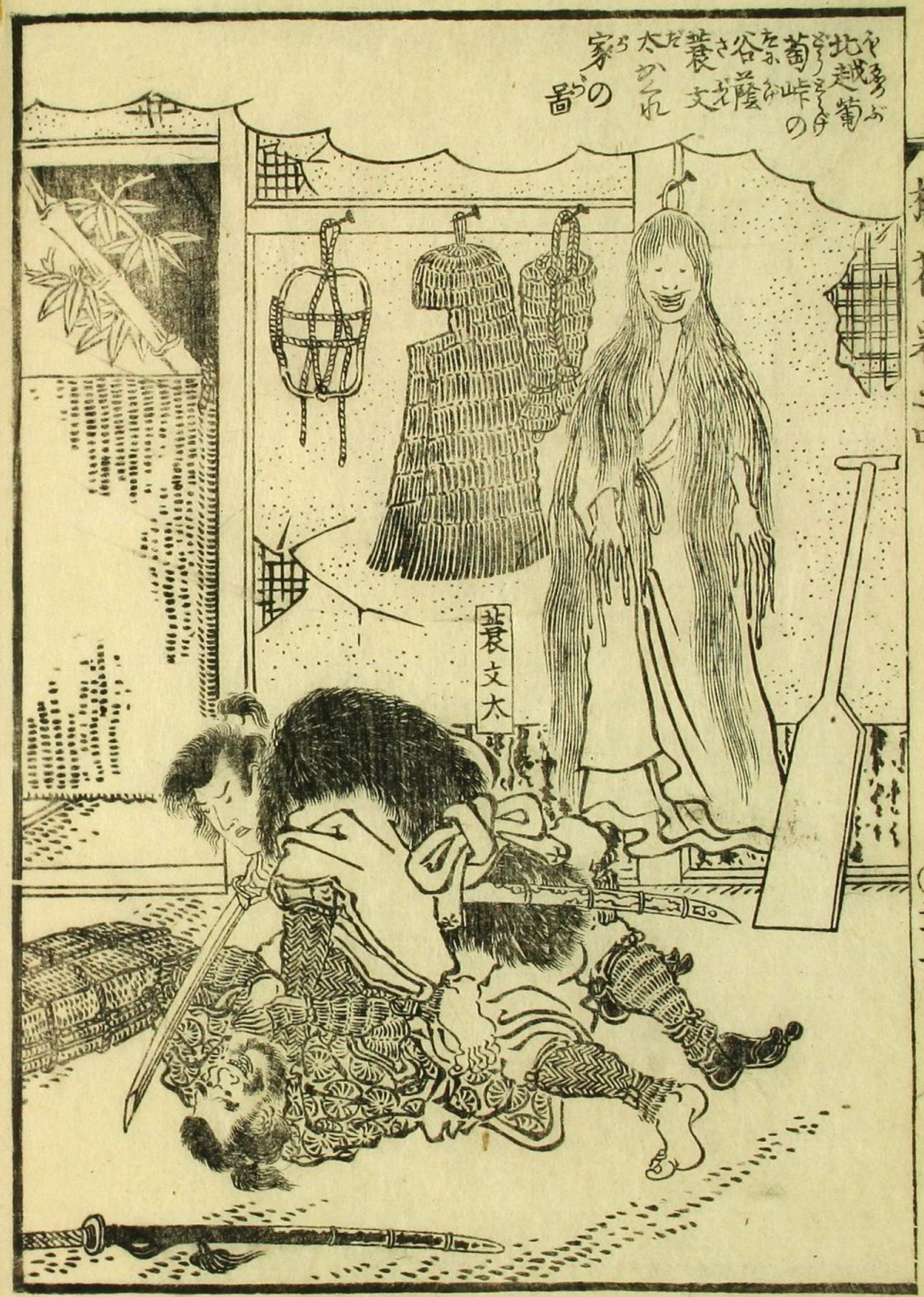
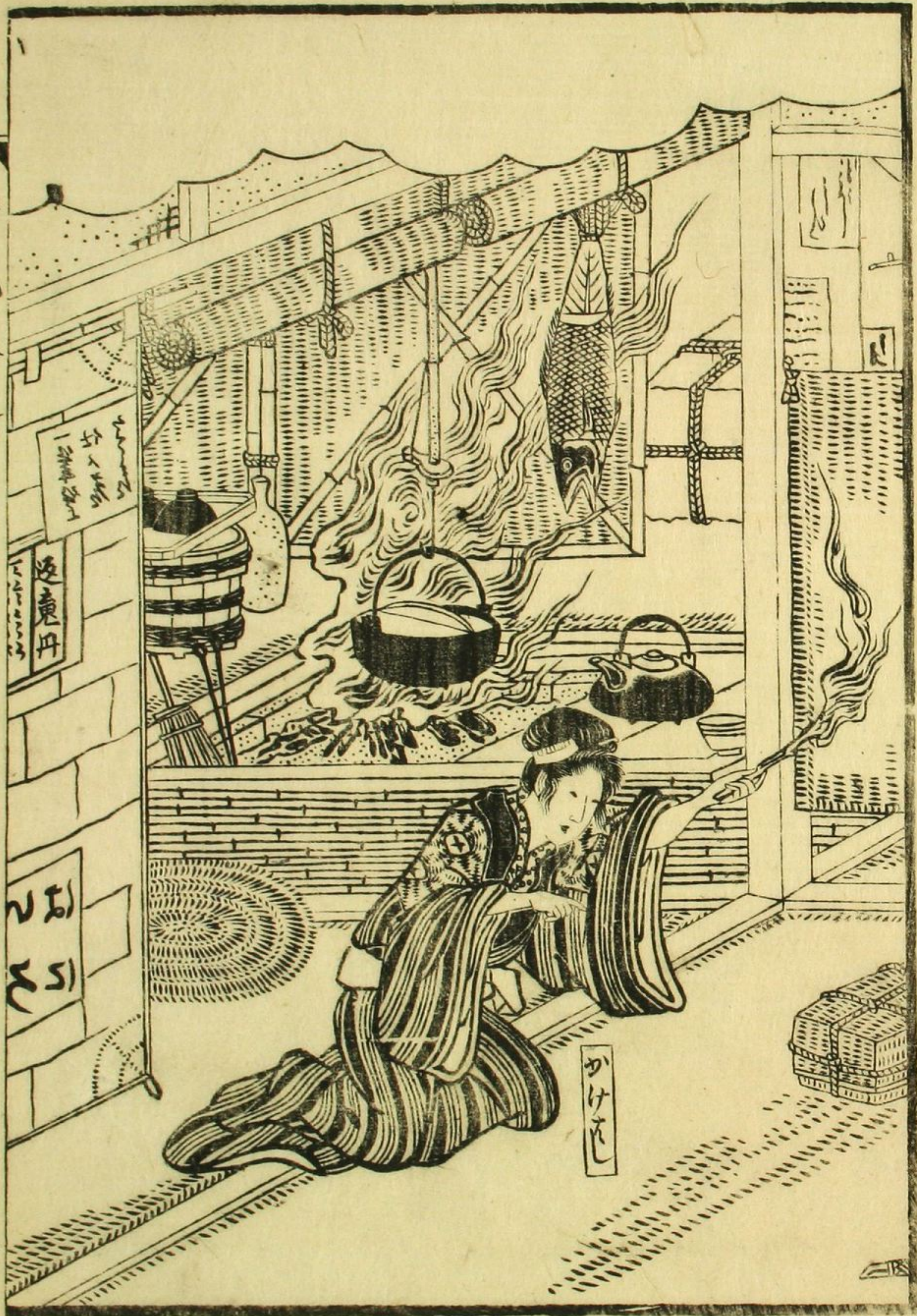
十九

夜中の道さどな侘あうおぶさもんやう荒屋をいとひ玉のどいふも
お宿やんのどこあふとを折戸をひぐさそむうどが旅人たびこ
早速の御承引めじけなうとそ蓑帽子をぬぎ様をとり睡巾
ちもとんとせーが寒気おこあるとつさそ紐とけど女おアてその多
火おあそあひおのぐううとけるん且ハさむさをもあのがあといひて
枯松葉をとり来て土回おまうけらる田炉裏お折へていざうぐ
あうりあといふあぞ旅人田炉裏お足をのをも折へていざうと
燃立火の光アふたがひお顔と又合せてあじの女声をげしく汝ハ
前の月木曾山の古社を妻をううとさ三百兩の金と名作の刀を
奪ひぬさう盗人おあうどやとりのがこちのこも驚馬さいさぬ汝ハ
時の女やりそをあひしおおの汝が不運小づい銀のたくりあ

ぱくくゆせゆあといひのめくのさあまんと女と捕へてのけさぬおおいた
氷や刀を枝て胸さるお押当おどく危く又えさう所お田鳥世長文
太雪女の狩衣束と一ころの酒と鮭の塩引をううと合せて月かこ
げ懐手して我家の門まをぬき来ては体をううりつと走るへ
かの盗人の腕をどとて逆おおあげ何奴おねば狼藉やうとと
聖言ハ棧やうて起あうと前の月金と刀を奪ひあう盗人ハは者やう
とひあぞ蓑文太お同さていさうかと油断のひあおの盗人たるま
腕とあうとやどさおひ斬おまうつけたると蓑文太ハ更ともせま躍
あうと飛こえとさうささうりさむ刀を避つひおおは蹴踏おふして
高手小手ふらしあげその模様をつつく又そされおと峠お谷
あひおあうかもまはしく汝かり鉤をのがとたりといども又綱おゆる

つてなさまは我は是さまをどの雪女なりとたわふまけはむかの盗人死
 念くと齒がらをとりて蓑文太をよく思はむまご面小白粉残す
 女もおよびぬ美男なりとて蓑文太の知辺よりて棧のめりて
 の酒をあてあさせゆりあぶる居て酒をのこす盗人ふむむい汝
 前ふ奪ひたりと三百両の金と鎧藤四郎の刀はいうせうどよくあま
 らふふいそ命をうりたさくべしそりて谷よとらふ盗人のりけ
 某武藝未熟ふしてあんふ敵さるる支あさりてかく死地ふおち
 へたれ何とつとてアさくさ某ハ元来筑紫の海賊郷音洋武と
 中を者なりが近頃彼地ある菊地大友の軍あつて山中海辺ふ至
 まを軍兵等の住家となりて我輩なりゆひをちまをまきくふされ
 へせんまむわりの地をのぐれ出て木曾の辺をさぬよひありき偶

かの古社あては婦人のあやうげなりさあて独ひを居あふをえつ
 ささめて物あんと推量しつひふ三百両の金と力を奪ひとり刀の
 路上を賣代あつてその金も三百両の金ととも骨柳のうちふ
 てせおひ夜中岨道をゆきけるふ半途ふ於てくらと繩ゆき骨柳と
 谷川ふおとしてゆくへ志とどかりをむらふゆるそ運命のつと
 さと致息しせめての身をよむる所もぐるとふひけりふえとど一人の
 小賊ふ出会しその賊のあつてけり和田の残黨能尾十郎とつふ
 者今羽州男麻山小寨をめぐりて山ざりて野伏強盗をあつて
 集ふぐり蛇丸と名をあつためて頭領となりな味方を集ふ
 ため我ごとき手下の者を諸国ふつて軍用の為ふ一藝あつる者
 をえりて味方ふのけむりとも寨中ある錢財多して二點の不足は



汝のひきまゝ一藝あるは中々の山ありて味方ふらむとて竹の
 割符と山本のあり間道引路の圖を与へし由多大力を得其を
 て水練子達一しつばそれをいひたてふ味方せんといふ心やさるかの地へ
 のぞくとて已ふ此辺を通りゆ今やどどとくかの刀の賣代は金あり
 まりて残らむ失ひゆげせんは金ありけしとてぬきとるものぢかれ
 何とぞ一命をあたをけしとてしとのつば蓑文太頭をうき動し
 めてさへいぬりのりちかんと金の金と刀の汝のうらうらとくおくらん
 あさふふいふとどいれちかち我一刀とくじて忽魂魄を追やぶ
 返着いふとのひて眼をうらげ明晃たる刀を目ささふつとつて
 り盗人のいづく此場ふらうといふとつらつらとやんマの金あり何
 くらもゆる大雪をおして銀雜の旅をいじやさんやは一更を以て

都てのりふあふるを察し入心の竹符も引路の圖も某が
 懐中ふあるところに収えたりとていふとをいじ入とのみあど蓑文太のれ
 が懐を探りてふその詞ふたがらど二つの物ありければとて引
 出しつらつとてまづ思案の体かじがやせ荒ふと笑ひてとち
 うあつとつとならあがりて刀をうきとてええしが盗人の頭たちま
 ち前あどまらびけり棧それとて柄杓水をとるとりて血刀ふら
 ぎ手巾をとるとりて拭ひて何ゆゑひとり笑ふふその意解しつと
 りが蓑文太まづ刀をおさめ一旦おしふ物をうらぐし一の大なり
 とのどもやうび又おしが手より此二品を得て一場の福を得る良
 計ありとの計の子細のゆりくゆるごととてえけるその謀
 何等の古又をわらやのまぶとてとどその子細をあらんと要

梅
花
永
裂
中
冊
終

其^ま且^ま次^まの^ま卷^ま次^ま読^ま得^まと^まあ^まる^ま登^ま一

梅
花
永
裂
中
冊
終

